

戦国期寺尾諏訪氏の基礎的分析

伊藤 拓也

- § 0. はじめに
- § 1. 寺尾郷の諏訪三河守（右馬助）——確からしいこと——
- § 2. 寺尾諏訪氏——傍証から——
- § 3. 小堤諏訪氏と諏訪三河守
- § 4. 寺尾諏訪氏のおわり
- § 5. むすびにかえて

梗概

横浜商科大学が位置する地域はおおよそ、中世後期は寺尾郷という郷村であり、戦国期には、諏訪氏という戦国大名北条氏の家臣が領主であった。この諏訪氏に関して、これまで正面から分析した研究は殆ど見当たらない。本稿においては、当該期の史料が極めて少ないという制約のもと、近世における地誌などの傍証史料を用いながら、その分析をおこなった。諏訪氏の当主が河越合戦で北条氏の使者をつとめ、『小田原衆所領役帳』で三河守を名乗り、本拠地の寺尾郷から遠く離れた江戸城に配属され、寺尾郷が最寄りではない玉縄城の管轄とされたことの意味を考察した。

キーワード：寺尾郷、諏訪氏（諏方氏）、諏訪右馬助、武蔵国久良岐郡、下総国小堤、諏訪三河守

はじめに

横浜商科大学の位置する地域はおおよそ、中世後期、武蔵国は寺尾郷という郷村（いわゆる村）であった。南北朝期には同時代史料に記載があり⁽¹⁾、

神奈川県横浜市鶴見区の東寺尾・北寺尾・馬場・上の宮・諏訪坂・寺谷、同市神奈川区の西寺尾・松見町を大体の範囲とする。この寺尾郷には、戦国期には、諏訪氏（諏方氏）という領主がいた（以下、寺尾諏訪氏）。戦国大名北条氏の家臣である。郷土史などで触れられ、後述もするように、寺尾諏訪氏の動向についていくつか貴重な指摘もなされている⁽²⁾。しかし、史料批判を行いつつ寺尾諏訪氏を正面から分析したものは、管見の限り殆ど見当たらない。よって本稿では、寺尾諏訪氏について、史料的制約のため若干の推測を交えつつ、分析をおこないたい。

なお以下、地名をあらわす際に神奈川県は略す。また、引用する史料集について、『戦国遺文』後北条氏編は戦北、『新編埼玉県史』資料編八は埼玉、『小田原市史』史料編原始古代中世一は小田原、『古河市史』資料別巻は古河、『新編武蔵風土記稿』（大日本地誌大系）三（雄山閣 一九五七年）は武風、と略記する。さらに、引用史料においては、筆者が傍線をひき、または読点や傍注を追加し、句点を読点に変えるなど改訂も適宜行っている。寺尾郷や小堤（後述、茨城県古河市）などのおおよその地理的關係については、次頁の【地図】を参照されたい。

第一章 寺尾郷の諏訪三河守（右馬助）——確からしいこと——

寺尾諏訪氏について述べられている最も確実な同時代史料は、『小田原衆所領役帳』である。永祿二年（一五五九）成立とされる（参考文献（3））。これは、北条氏の家臣団のリストとでもいうべき史料であるが、そこに、諏訪三河守、寺尾諏訪氏の当主とみられる人物の記載がある。

【史料1】『小田原衆所領役帳』江戸衆より（戦北別巻八八頁）

久良岐郡

一式百貫文

寺尾

諏訪三河守

役致来

この史料からは、次に示すことが読み取れる。諏訪三河守は北条氏の家臣であり（北条氏に対してつとめる知行役は従来通り）、江戸衆、つまり支城（北条氏の本拠以外の重要拠点）の江戸城（東京都千代田区）の軍団（支城衆とよばれる）に所属していること。その所領は寺尾郷（貫高は二〇〇貫文）であり、他に所領もなくことが諏訪の本拠地であろうこと、寺尾郷は玉縄領の「久良岐郡」に属していること³⁾。



【地図】『小田原市史』史料編中世二 付録を加工

玉縄領は、支城領と呼ばれる、北条氏が支城の玉縄城（大船市）を中心として設定した行政単位であり、公事と呼ばれる税を北条氏が収取する単位である。範囲は、およそ神奈川県相模川以東から、三浦半島と横浜市の北部・中部・東部と川崎市を除いたあたりである。相模国と武蔵国

をまたいだ範囲をもち、玉縄領の西部は相模国「東郡」、東部は武蔵国「久良岐郡」と呼ばれた。「久良岐郡」（本稿では「」付きで表記）は、およそ横浜市の南部付近、古代以来の久良岐郡の南部をその範囲とする。だが、寺尾郷は、そこにはない。古代以来の久良岐郡には属していたが、その東部に位置するのである。横浜市の北部・中部・東部と川崎市の範囲は、小机領という別の支城領に属している。寺尾郷は、エリアとしては小机領のなかにある、玉縄領のいわゆる飛び地である⁴⁾。

つまり諏訪三河守は、自身の本拠地の最寄りの小机城ではなく、遠く離れた江戸城の支城衆に所属しており、しかもその本拠地の寺尾郷は、小机領ではなくその西隣の玉縄領に所属していたのである。こうしたケースは珍しいとまではいえないが、相応の歴史的過程を経てこうした状況に至ったことは確かである。その詳細は分らないが、次章において述べていくこととする。

さて諏訪三河守は、その前身とみられる人物が、同時代史料に準じた⁵⁾他の史料にも記載される。北条氏康（北条氏第三代当主）が古河公方足利晴氏の重臣である梁田高助にあてた書状のかたちをとるこの史料は、天文一五年（一五四六）の著名な合戦、北条氏が足利・上杉連合軍と戦った河越合戦に関するものである。

【史料2】北条氏康書状写（「歴代古案」戦北二七四号文書）

（前略）氏康無拠、号砂窪地へ打出、以諏訪左馬助、小田政治代管谷隠岐守、雖未聞不見之仁候、從御備之内招出相頼、河越籠城之者共、身命計御救免候者、其方人数為警固、只今要害為明渡可申、氏康罷出之由、申上候処、御逆鱗以外之間、重而難達上聞之由、挨拶候之間、則諸軍砂窪へ押寄候之間、時節到来、難通遂一戦、於当口案内切勝、憲政馬廻為始、倉賀野三河守、三千余人討捕候、就中、此度之讒者根本人難波田入道・小野因幡守討取候、（中略）恐惶謹言、

（本）天文十五年四月廿九日卜有

天文十二（五）

左京大夫

氏康

四月十日「書二有之」

進上 築田中務大輔殿（梁田高助）

傍線部にて、北条氏康が戦場で使者を遣わしている。連合軍に囲まれた河越城（埼玉県川越市）に籠城する北条氏方の人々の助命と引き換えに、城

を連合軍に明け渡すという交渉をするためである。だが交渉は行われず合戦に至り、北条氏が勝利をおさめることとなる。その使者が、三河守の前身とみられる北条氏家臣、諏訪右馬助である。諏訪は、古河公方与党の小田氏（小田〔茨城県つくば市〕の、中世前期以来の有力武士）の重臣である菅谷隠岐守を敵陣から呼び出して頼み、古河公方方との交渉を行おうとしている。菅谷は、北条氏康にとつては聞いたこともない人物であった。だが諏訪右馬助は、彼に何らかの伝手（もしくは面識）があったようである。また諏訪は、使者をつとめられる能力を有した武士であったとみられる。ここでは、氏康の意を正確に汲み取って先方に伝え、さらにそこで、いわゆる外交交渉をも遂行する能力^⑥である。砂窪（埼玉県川越市）の氏康の陣にいる人材で、そうした能力などの面で最も適格とみなされたのが、ほかならない諏訪右馬助であったのであろう。主人の氏康も把握していない寺尾諏訪氏のもつ伝手とは、一体どのようなものであつたらうか。詳細は分からないが、第三章にて、できるだけ明らかにしてみたい。

寺尾諏訪氏について語る同時代史料、もしくはそれに準ずる史料から直接的にいえるようなことは、大略以上である。次章では、主に近世の伝承の類による傍証を用いて、分析をすすめていく。

第二章 寺尾諏訪氏——傍証から——

さて、北条氏康の祖父である伊勢早雲^⑦（いわゆる北条早雲）が、一六世紀初頭前後に相模国西部の小田原城（小田原市）を攻略したとき、世代的にみて諏訪三河守（右馬助）の先代か先々代にあたるであろう、諏訪右馬介（助）という人物が、次の史料、近世初期の軍記物語に現れる。

【参考史料1】『北条記』立川原合戦事（埼三四三三四四頁）より

小田原ノ城ハ扇谷殿ノ領分ナリシカハ、大ニ驚キ、分国ノ勢ヲ以テ責ラルヘシト聞エケレハ、早雲、賢キ謀ニ扇谷殿ヘ使者ヲ立テ、先御旗下ニ成御下知ニ随ヒ可申由、武州寺尾住人諏訪右馬介ヲ以テ再三和談ヲ請ヒケレハ、扇谷殿誠トヤ思召ケン、小田原ヲモ不被責、（後略）

小田原城（小田原市）は、上杉朝良（扇谷殿）の勢力範囲にあつた城である。朝良は、関東管領上杉氏の一族で、戦国期に関東の南西部を領域支配していた（のち河越合戦で滅亡する）扇谷上杉氏の当主である。その小田原城を早雲が取ったことが問題となり、早雲は朝良に攻められそうになつ

た。そこで早雲は朝良に使者を出し、朝良に服属してその命令に従う旨を伝え、再三説得して朝良を納得させ、和談に持ち込んだ。これが、右史料の語るところである。この説得の仲介役にあたつたのが、傍線部のように、寺尾郷の住人である諏訪右馬介（助）である。このときの右馬介は、おそらく扇谷上杉氏に服属していたか、もしくはその家臣となつていたと理解しうる。扇谷上杉氏にあって、伊勢氏担当の「取次」のような立場にいたのかもしれない^⑧。

早雲はこののち、扇谷上杉氏方などの武士たちとの戦いのすえ、永正一三（一五一六）年に相模国を平定した。それに前後して、武蔵国の南西部の端、古代以来の久良岐郡の南部付近をも勢力下におさめた（たとえば参考文献^⑦）。その頃には、『鶴見区史』（参考文献^②）も説くように、寺尾諏訪氏は伊勢（北条）氏に従い、家臣となつたものと推測される。そのことをあらわす傍証となるのが、次の史料である。今から七〇年ほど前に東京都三鷹市の旧家で発見された^⑨が、当時の状況をある程度あらわしていると考えられている。

【参考史料2】『小田原旧記』（小田原三五四号文書）より*（*は割注）
（前略。大道寺家「御出緒家」の七家、葛山家「駿河衆四家」、桑原家「伊豆衆」の二十一家^⑩）

相模衆十四家
間宮家 石巻家 安藤家 梶原家 大谷家 諏訪家
橋本家 関家 福富家 中村家 酒和家 行方家
河村家 布施家
右者、〔早雲寺殿小田〕小田原御平定之節、最初二御手ニ属する家なり、

以上四拾六家者、御草創之功臣として、御取扱別段なり、

ここで寺尾諏訪氏は、傍線部のように、武蔵国の寺尾郷にありながら「相模衆」、つまり小田原城攻略の際に北条氏に従つた家と扱われている。そのころ早雲の勢力下に入った地域と寺尾郷とは遠く離れており、その段階で寺尾諏訪氏が明確に早雲に与していたとは考えにくい。ただ、おそらく前述の仲介により、少なくとも伊勢（北条）氏側には、寺尾諏訪氏は早雲の味方であつたと認識されていた。そして相模国平定の頃までには伊勢氏

に従い、その家臣となつていった。そのように想定される。先述のように、『小田原衆所領役帳』では、寺尾郷が「久良岐郡」の飛び地とされていたが、それは、領主の寺尾諏訪氏が早雲の段階で扇谷上杉氏を見限り、伊勢氏に与し従つたという由来をもつたと筆者は考える⁽¹¹⁾。なお、『小田原衆所領役帳』で寺尾諏訪氏が江戸衆に配属された(先述)のは、北条氏家臣となつた寺尾諏訪氏が扇谷上杉氏との前線に立つて戦い、大永四年(一五二四)に早雲の子の北条氏綱が扇谷上杉氏の重要拠点である江戸城を攻略した後、そこに配属されたことによると考えられる。

さて、寺尾諏訪氏は北条氏の家臣となる前は扇谷上杉氏に従つたとみられることは先に述べたが、その前には、寺尾諏訪氏はだれに従つていたのだろうか。また寺尾郷にいたのは、いつからであろうか。そのヒントをあらわす傍証となるのが、次の史料、近世の地誌である。

【参考史料3】『新編武蔵風土記稿』橋樹郡東寺尾村白幡明神社の項(武風二五一頁)より

(前略) 例祭毎年六月五日湯花神楽等あり当村の鎮守なり、社辺に古松数株繁茂せり、西寺尾村建功寺過去帳に(中略) 永享七年六月五日、寺尾の城主諏訪勧請すとあり、土人の云伝ふる所も亦かくのごとし、(後略)

傍線部は、寺尾諏訪氏の館(寺尾城。横浜市鶴見区) 近くにある、いわゆる菩提寺の建功寺(横浜市鶴見区)の記録や、土地の人の言い伝えである。それによると、永享七年(一四三五)六月五日に寺尾諏訪氏が白幡神社(横浜市鶴見区)を「勧請」したと伝わる。その六月五日が近世後期には同社の例祭の日でもあったようである。ただ白幡神社は「鶴見寺尾郷絵図」に描かれており、南北朝期にはすでに存在しているので、「勧請」は再興と理解すべきであろうか。いずれにしても、のちに例祭の日とされるような「勧請」を行った寺尾諏訪氏は、『新編武蔵風土記稿』の著者が寺尾諏訪氏の館(寺尾城、横浜市鶴見区)を「永享の頃にはもはやたちし城」と考証していた(武風二五七頁)ように、すでに永享七年には寺尾郷に領主として存在していたと解釈しうる伝承である。寺尾諏訪氏が天正三年(一五七五)まで五代つづいたという伝承もあるため、世代的にみて、この永享七年に領主となつたのかもしれない⁽¹²⁾。

寺尾郷は、南北朝初期に、阿波国守護の小笠原藏人太郎入道が地頭をつとめていたことが『鶴見寺尾郷絵図』から分かる。そして南北朝期には、

鎌倉の寺院である正統庵(鎌倉市)が小笠原氏の次の地頭となつた可能性もある⁽¹³⁾。ともあれ室町期に、諏訪氏の一族が鎌倉公方足利氏⁽¹⁴⁾に寺尾郷を与えられ下向して領主となつたのが、寺尾諏訪氏であつたと推測しうる。寺尾諏訪氏は、信濃国(長野県)の諏訪氏の末葉であろうことはいうまでもない。だが諏訪氏一族は、南北朝・室町期に京都で室町幕府の奉行人をつとめたもののほか、鎌倉にもいたことが知られている⁽¹⁵⁾。後者は鎌倉府の奉行人ではなかったようである(参考文献⁽⁹⁾植田氏論稿二二五頁)が、鎌倉公方の家臣ではあつただろう。信濃や京都との関係、または内部の系譜関係などについては、うかがい知ることができない。だがこの鎌倉の諏訪氏のうちで、永享七年までに寺尾郷を与えられたものが、寺尾諏訪氏だつたのではあるまいか。

以上、寺尾諏訪氏、諏訪三河守(右馬助)の家について分析し、以下のことを明らかにした。寺尾諏訪氏のもと鎌倉公方の家臣であり、室町期に鎌倉公方から寺尾郷を与えられそこに住み、戦国期には扇谷上杉氏に従つたと推測される。伊勢早雲(一五一九年没)の晩年頃には伊勢(北条)氏家臣となつた。そののちは扇谷上杉氏との前線に立つて戦い、おそらく攻略後の江戸城に配属された。のち江戸衆に配属されたのは、そのためと推測される。そして所領の寺尾郷が玉縄領「久良岐郡」に編入されたのは、早雲との「取次」のような立場から家臣になるに至つた由来によるためと推測しうる。

ところで、第一章で述べたように、諏訪右馬助は永禄二年に三河守という受領名(いわゆる通称のひとつ)を名乗るに至るが、その受領名は、後述するように諏訪氏にとつて著名かつ重要なものである。右馬助はなぜ、これを名乗つたのだろうか。次章で考えてみたい。

第三章 小堤諏訪氏と諏訪三河守

戦国期、寺尾郷の諏訪三河守と同名の人物が、古河公方の本拠の古河城(茨城県古河市)の程近く、下総国は小堤(同)というところにいたらしい。次に示す近世の地誌によると、小堤の領主にして古河公方の家臣と伝わる。古河城の一角となる地に諏訪神社を勧請したと伝わる。その一角(諏訪郭)を管轄していた可能性もある。

【参考史料4-1】『古河志』より(古河二四五～二四六頁)

一 諏訪方郭（諏訪郡上谷郡） 郭内に諏訪の社勧請しある故也、或云、公方在城

の頃、信濃諏訪の一族三河守といひし人、家臣となり此所へ住つるが、本国の産神なればこゝにうつし祭りたる也と、諏訪の家系いまだ搜索せざれども、虚伝にはあらず、（後略）

【参考史料4-2】『古河志』小堤村の項より（古河三三五頁）

（前略）城跡と云伝へたるは、（茨城県古河市）円満寺の三町程南字寺家山と云所の西に、堀の内に農家ある地也、諏訪三河守といふ人の居城或は陣屋ともいひ伝ふ、

（中略）

一 両界曼荼羅（竪七尺、横五尺、絵師正林筆、已上寺説略） 掛幅裏に諏訪三河守寄附とあり、

これらは近世の伝承に過ぎないが、少なくとも傍線部の裏に諏訪三河守が寄付したと書かれた両界曼荼羅は現存し、小堤の円満寺（茨城県古河市）が所蔵しており、茨城県指定文化財となっている（有形文化財 絵画32号、絹本着色両界曼荼羅）。『古河志』の著者の小出重固が「虚伝にはあらず」と既に考証するように、同時代史料にはほぼ現れないが、小堤に古河公方の家臣の諏訪氏（以下、小堤諏訪氏と表記）は存在したとみられる。円満寺は、小堤諏訪氏のいわゆる菩提寺とみて差し支えないだろう。鎌倉公方が戦国期初頭に古河に移り古河公方となると、鎌倉の諏訪氏でそれに随って古河に来たものが出て、古河公方から古河城近くの郷村である小堤を与えられ、そこを本拠とした。それが古河公方の家臣、小堤諏訪氏ではあるまいか。

ただ小堤諏訪氏は、寺尾郷の諏訪右馬助が三河守を名乗るころには、すでに断絶していたと思われる。この史料、円満寺に残る石碑の銘文が、史料上の終見である。

【参考史料5】小堤円満寺碑文（古河志）古河三三六頁）

大曼荼羅施主訪諏三河守息女

（梵字）小堤大母妙盛大姉

大永六戊年六月 本願円満寺住

法印俊恵

この石碑は小堤の三河守の娘の墓とされ、大永六年（一五二六）に娘を円満寺に葬る際に「大曼荼羅」（＝先述の両界曼荼羅）を寄進したとされる（参考文献〔10〕）。ただこの石碑自体は近世、つまり後世のもののようにある（参考文献〔11〕）。しかし少なくとも、大永六年に小堤の三河守が

その娘を円満寺に葬り、そして両界曼荼羅を寄進した。そうした伝承とみることが可能であろう。これ以降、小堤諏訪氏は姿を消す。

【史料3】梅千代王丸（足利義氏）充行状（『野田文書』「戦国遺文」古河公方編八〇五号文書）

先御落居之地廿五郷

（中略）

小堤（茨城県古河市） 大野（茨城県古河市）

（中略）

以上廿五郷

（中略）「重御落居之地」三郷、「小山領十一郷」

右之地被充行者也、尚以小山領之儀者、永代不可有御相違候、仍如件、

天文廿三年（甲寅）十二月廿四日

（足利義氏朱印、印文「大和」）

野田左衛門大夫殿

これは、古河公方の足利義氏（晴氏の子）が家臣の野田氏にあてた朱印状、同時代史料である。傍線部のように、天文二三年（一五五四）には、諏訪氏ではなく、野田氏が小堤の領主となっていることが分かる。小堤諏訪氏は、このときには本拠地にはおらず、天文年間にはすでに絶家していたと思われる。信濃国（長野県）に去ったともいわれる（参考文献〔11〕）が、なぜ絶えたのかは分からない。

さて第一章で述べたように、寺尾郷の諏訪右馬助は、古河公方の与党小田氏の家臣菅谷隠岐守に何らかの伝手があり、いわゆる外交交渉ができる立場にもあった。これは、古河公方の家臣であった小堤諏訪氏の一族であったためと考えられる。もしかしたら、そのことをもとにして、小堤諏訪氏や菅谷氏と交流もあったのかもしれない。少なくとも、河越合戦において右馬助が使者を任された要因の一つに、関東の諏訪氏一族¹⁶のつながりがあったと理解しうる。

そして諏訪右馬助は、これも第一章で述べたように、永禄二年（一五五九）の「小田原衆所領役帳」では三河守を名乗っている。このころには絶家した小堤諏訪氏の当主の名を継承したものと思われる。これは周知に属するが、諏訪氏において、三河守は著名な受領名である。かつて南北朝期に、滅亡した鎌倉幕府の再興をにかけて北条時行をかつぎ、一時は関東の首府

である鎌倉を占拠し関東を勢力下においた中先代の乱を主導した諏訪頼重が名乗ったと伝わる⁽¹⁷⁾。この受領名は、とくに関東においては重要な意味を有し、関東の諏訪氏一族の宗主のような立場を主張する意味をもったものではなからうか。

第四章 寺尾諏訪氏のおわり

寺尾諏訪氏は、北条氏家臣として活躍する。前述の河越合戦のほかにも合戦に参加するなど、軍記物語に散見する⁽¹⁸⁾。また地元には、「寺尾城主諏訪馬之丞(右馬助)」が馬術訓練のため馬場を設けたとの伝承もつた⁽¹⁹⁾。

しかし、この寺尾諏訪氏にも絶家のときがやってくる。同時代史料としては史料1が終見だが、建功寺の近世の記録とされる「靈簿」に、

天正三年⁽²⁰⁾諏訪発落、

とある(参考文献(2)「建功寺誌」一六頁写真)。これが寺尾諏訪氏の終見である。既に指摘されているように、この天正三年(一五七五)に絶家したとみられる⁽²⁰⁾。なぜ絶えたのかは、戦死説もある(参考文献(2)「鶴見の諏訪氏」一八頁)が、史料上の裏付けはなく、よく分からない。このときの当主は、史料1の三河守の次代にあたる右馬助とみられる⁽²¹⁾が、この右馬助がいなくなり、後継者もいなかったためであろうか。

寺尾郷は、寺尾諏訪氏が絶えたのちは、北条氏の直轄地となったとみられる。近世の地誌『新編武蔵風土記稿』西寺尾村の項に、「小田原へ貢米を運」んでいたとある(武風二四八頁)。寺尾諏訪氏がなくなったあとと領主となった北条氏に対し、寺尾郷の百姓が北条氏の本城(本拠地)の小田原城に年貢(貢米)を運んでいた伝承と解釈できる。

むすびにかえて

以上、寺尾諏訪氏について分析してきた。その結果あらわれた寺尾諏訪氏の姿は、次のとおりである。

戦国期の寺尾郷の領主である寺尾諏訪氏は、鎌倉の諏訪氏一族で、室町期に鎌倉公方(足利氏)に寺尾郷を与えられ、そこを本拠としたと推測される。戦国期には、おそらく扇谷上杉氏に従った。

のち、伊勢早雲の没出に伴い、その家臣となる。おそらく、扇谷上杉氏にあって伊勢(北条)氏との「取次」のような役目をつとめ、早雲の晩年ごろには伊勢氏に従い、その家臣となった。寺尾郷が最寄りの小机領ではなく玉縄領に属したのは、そうした経緯によるとみられる(小机領にあたる地域は、次代の北条氏綱が経略)。いっぽう寺尾諏訪氏は、本拠から遠く離れた江戸城に配属される。右記の経緯により、北条氏家臣となった寺尾諏訪氏が扇谷上杉氏との前線にたち戦ったことによるためではなからうか。

天文一五年(一五四六)の河越合戦では、諏訪右馬助が、戦場で古河公方の使者となり、主人の北条氏も把握していないような伝手をもちいてその役目をつとめている。その能力はもちろん、古河公方家臣の小堤諏訪氏の一族であったため、使者として適格とされたものと思われる。

諏訪右馬助は、永祿二年(一五五九)までには、小堤諏訪氏の当主が名乗っていたとみられる受領名の三河守を名乗る。天文年間には没落していた小堤諏訪氏の当主の受領名を引き継ぎ、関東の諏訪氏の宗主的な立場を主張したのではあるまいか。

しかし、寺尾諏訪氏も、河越合戦で活躍し三河守を名乗った当主の次代にあたる諏訪右馬助をおそらく最後に、天正三年(一五七五)に没落したと伝わる。原因は不明である。寺尾諏訪氏は絶家したとみられ、それ以来、歴史から消えた。寺尾郷は、北条氏の直轄領となったと推測される。

本稿の成果は、とくに、寺尾諏訪氏の当主が三河守を名乗り江戸城に配属され、その本拠地の寺尾郷が玉縄領に属したという事実の意味、そして主人の北条氏康も把握せざる寺尾諏訪氏の伝手の意味を考察したことである。後者については、近年、遠隔地間の広域的な同族ネットワークや一族分業に関する議論が、中世前期だけでなく中世後期についても注目されつつある(参考文献(14))。諏訪氏については、京都の諏訪氏の研究が進んでいて、室町幕府奉行人としてだけではなく、信濃国の諏訪氏とのネットワーク・分業について、分析検討がなされている。たとえば、信濃国の諏訪氏は諏訪大社(長野県)の神事を司り、京都の諏訪氏は室町幕府内において諏訪信仰の流布に重大な役割を果たす、という分業の存在が指摘されている⁽²²⁾。関東の諏訪氏については、信濃国や京都の諏訪氏との関係は、そ

1

記

3

3

4

5

6

8

10

11

北条氏綱の段階で経略された残りの地域が小机領に編入されたと筆者は理解する。小机領に編入された地域は、基本的には、近世は橋樹郡へ編入されることになる。中世と近世とで久良岐郡と橋樹郡との郡境が大きく改編されたことはよく知られているが、その契機は、右のごとき、北条氏による玉縄領と小机領の設定にあつたのではなからうか。

本文後述の「靈簿」に、寺尾諏訪氏の二代目が参河守、三代目が平三郎、四代目が参河守、五代目が馬之丞と伝わる(参考文献〔2〕『寺尾城の実証略記』三頁)。あるいは、四代目が史料1の三河守、五代目がその次代の右馬助にあたるか。なお、諏訪氏の「寺尾城築城」を永享二年(一四三〇)頃とする説もある(参考文献〔2〕『寺尾城百話』八〇頁)が「築城」の年次を「勸請」の五年前に遡らせる根拠は特に示されていない。

参考文献〔1〕高島氏著書三七―三八頁、同吉田氏論文四九―五〇頁。

室町幕府將軍の一族。鎌倉府という、関東を支配統括した幕府の出先機関の首長。ちなみに戦国期の古河公方は、鎌倉公方の後身。関東の東部を、有力武士たちを従えて支配した。

京都の諏訪氏については、たとえば参考文献〔9〕の村石氏の論稿。鎌倉の諏訪氏については、同じく佐藤氏と植田氏の論稿。

関東の諏訪氏は、ほかには上野国(群馬県)西部に存在が確認される(参考文献〔12〕ほか)。

諏訪頼重は、同時代史料には「諏方三河入道照雲」などと記載され(参考文献〔13〕『大日本史料』四六四頁、南北朝期の『太平記』や近世初期に江戸幕府が編纂した系図には、三河守を名乗ったと伝わる(参考文献〔13〕『大日本史料』四六七頁、同五四九頁、同『寛永諸家系図伝』一〇九頁。頼重を三河權守と伝える系図もある(参考文献〔13〕『大日本史料』五五七頁)が、一般に伝わっていた頼重の通称は、著名な『太平記』にもある三河守であつたと思われる。

たとえば、『北条記』加嶋合戦事・信玄小田原出張事(埼玉三八〇頁、四〇四頁)。藤田鎌吉・長島誠一編『鶴見興隆誌』(自由新聞社 一九三〇年)附録一八頁。馬場とされた所は現在の馬場稲荷(横浜市鶴見区)。

たとえば参考文献〔2〕『建功寺誌』二〇頁。「靈簿」には、諏訪の「発落」は享保一六年(一七三二)から数えて一六一年になる、という旨の記載があるが、実際には一五六六年である。そこで参考文献〔2〕の『寺尾城の実証略記』のように「靈簿」記載の一六一年を採って、「発落」は天正三年

(一五七五)ではなく、一五七〇年に当たる年と主張する説もある(三頁)。しかし年号より年数の方が誤記は多いと思われる。よって、『建功寺誌』の指摘と同様、一六一年は誤記であり、「発落」はやはり天正三年(一五七五)のことと解釈しておく。なお、諏訪氏の没落を北条氏滅亡の段階のこととする説も郷土史で語られている(柊野俊明氏のご教示)が、必ずしも史料に基づいていない。

〔21〕『北条記』信玄小田原出張事(埼玉四〇四頁)にて、永禄二年(一五六九)の武田信玄の小田原侵攻に際して、各々の「在所」にあつた多くの北条氏家臣が軍勢の大半を小田原城に派遣したため小勢となり、武田軍の通過を黙認せざるを得なかった旨の記述がある。その家臣の中に、「諏訪右馬助」がいる。世代的にみて、『小田原衆所領役帳』の諏訪三河守の次代の当主とみられる。

〔22〕たとえば、参考文献〔9〕村石氏二〇〇五年論文三三―三三頁・三五頁、同二〇一五年論文二八七―二八八頁。

参考文献

- 〔1〕高島緑雄「建武元年正統庵領鶴見寺尾郷図の研究」(同『関東中世水田の研究』日本経済評論社 一九九七年、初出一九八七年)、吉田敏弘「荘園絵図にみる東国中世村落の成立過程と古代寺院」(地方史研究協議会編『地方史・研究と方法の最前線』雄山閣出版 一九九七年)ほか。
- 〔2〕『寺尾郷土史研究』(寺尾郷土史研究会 一九六七年、『寺尾城百話』(同研究会『寺尾郷土研究会 一九七四年・持丸輔夫『寺尾城百話』(同研究会一九七七年、『鶴見区史』(一九八二年)五四―五六頁、瀬田秀人「鶴見の諏訪氏」(つるがしむ別冊三、一九八七年)・同『鶴見川歴史散歩』(230クラブ新聞社 一九九三年)、鶴見歴史の会、建功寺『建功寺誌』(徳雄山建功寺 一九九四年)ほか。
- 〔3〕池上裕子「戦国大名領国における所領および家臣団編成の展開」(同『戦国時代社会構造の研究』校倉書房 一九九九年、初出一九七六年 四八―五六頁)。
- 〔4〕黒田基樹『扇谷上杉氏と太田道灌』(岩田書院 二〇〇四年)八八―九〇頁。山口博「北条氏康と東国の戦国世界」(夢工房 二〇〇四年)二八―三〇頁、『北条氏年表』(高志書院 二〇一三年)六〇―六一頁。

- 〔5〕 山田邦明『戦国のコミュニケーション―情報と通信―』（吉川弘文館二〇〇二年）。
- 〔6〕 丸島和洋『戦国大名武田氏の権力構造』（思文閣出版 二〇一一年）。佐脇栄智「北条早雲・氏綱の相武侵略」（黒田基樹編著『北条氏綱』戎光祥出版 二〇一六年、初出一九八一年）六五頁、黒田基樹「小田原北条家の相模経略―戦国時代の到来―」（関幸彦編『相模武士団』吉川弘文館二〇一七年）二一八頁。
- 〔8〕 『小田原衆所領役帳 江戸廻り葛西分抄・考 小田原旧記』（江戸町名俚俗研究会 一九六八年）。
- 〔9〕 村石正行「室町幕府奉行人諏訪氏の基礎的考察」（『長野県立歴史館研究紀要』一一、二〇〇五年）、同「中世後期諏方氏の一族分業と諏訪信仰」（徳田和夫ら編『諏訪信仰の中世―神話・伝承・歴史』三弥井書店 二〇一五年）。佐藤博信「上杉氏家臣木部氏の軌跡」（同『統中世東国の支配構造』思文閣出版 一九九六年、初出一九九三年）註二、植田真平『鎌倉府の支配と権力』（校倉書房 二〇一八年）一八九―一九〇頁・二一五―二二五頁（初出は二〇一三年・二〇一二年）。
- 〔10〕 『茨城県の地名』（平凡社 一九八二年）七四〇頁。
- 〔11〕 内山俊身「小堤城跡出土古銭―下河辺荘小堤郷の中世的景観から―」（『そのわの文化財』五、一九九六年）一九頁。
- 〔12〕 峰岸純夫「上州一揆と上杉氏守護領国体制」（同『中世の東国―地域と権力―』東京大学出版会 一九八九年）二二五頁・二二四頁。
- 〔13〕 『大日本史料』六編之二（東京大学史料編纂所 一九〇一年）、『寛永諸家系図伝』五（統群書類従完成会 一九八二年）。
- 〔14〕 谷口雄太『中世足利氏の血統と権威』（吉川弘文館 二〇一九年）三二四頁―三二五頁。

